

かとうじろう  
加藤 二 郎

学位の種類 博士(文学)  
学位記番号 文 第 169 号  
学位授与年月日 平成12年12月7日  
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 漱石と禅

論文審査委員 (主査)

教授 仁 平 道 明      教授 佐 藤 伸 宏  
教授 玉 懸 博 之  
教授 中 嶋 隆 藏

## 論文内容の要旨

本論文は、第一部漱石と禅、第二部漱石漢詩と禅、の二部の構成を取っている。更に第二部の付章として、「『明暗』期漱石漢詩の推敲過程」を付してある。以下論文全体の要旨をたどって行きたい。

第一部漱石と禅について、最初に基本的な立論の立場を述べるなら次の如くである。

文学研究に於いて、一般にある作家なり作品と宗教とのかかわりを論ずるという場合、例えば仏教なら仏教、あるいはキリスト教というものを、哲学的、宗教哲学的に論理的に規定、固定しておいて、それとの言わば遠近を測るという仕方、方法によって、作家、作品への宗教の投影、双方のかかわりが論じられるというのが常である。本論文の基本的な立場もそうした方法を離れたものではない。併し本論文を流れているより基底的な思惟と意図は、むしろ夏目漱石の人及び文学の歩みの中に、禅仏教そのものの近・現代的な生成と展開の相を見ようとする所にある。即ち既成宗教としての禅仏教の、一方的一義的な漱石への投影と投射の姿を見るところという立論の立場にはなっていない。そうした方法によっては捉え切れないものが、漱石と禅との相互性の内景であったと言えるということである。

第一章「達磨」に於いては、禅宗の初祖達磨への漱石の関心とかかわりをたどる中から、漱石と禅とのかかわりが、総体としてどのような性格と方向性を持つものであったのかを論じている。漱石には水彩画による一幅の達磨図の制作がある。大正2年、つまり1913年の制作とされ、『行人』執筆期の漱石によるものであり、漱石の描き遺した数多くの絵画作品の中でも、この達磨の画は、所謂歴史上の實在の人物を対象としたものとしては、殆ど唯一のものである。

漱石には又、「廓然無聖達磨の像や水仙花」「本本の面目如何雪達磨」「春風に祖師西来の意あるべし」などの俳句があり、そこにも達磨を背景とした漱石の禅仏教への視線が、如何なる広がりや備えたものであったのかが示唆されている。併し漱石の達磨へのかかわりは、単に絵画や俳句等の表現のその素材の域にとどまるものではもとよりなかった。例えば『無門関』第四十一則の「達磨の安心」の章で著名な、達磨と二祖慧可との問答、特にその焦点となっている「心不可得」の語の漱石内での軌跡がある。即ち「心不可得」の語に象徴される禅仏教の、従って宗教的レベルでの人間の「安心」と「不安」の問題は、禅僧大徹を作品の焦点に据えた初期の『草枕』から、「人間の不安は科学の発展からくる。……」として禅僧香巖へ憧憬を語る『行人』（の長野一郎）へと及びつつ、漱石逝去の年大正5年（1916）の評論『點頭録』、つまりは遺作『明暗』にまで貫流するものであった。そしてそこに漱石の人及び文学に於ける禅の位置と意味、その基本的な方向性は語られている。

漱石文学の中には、人間の「歩行」というものへの持続的な関心が示されており、その「歩行」という事柄を媒介とした様々な問題が描写叙述の対象とされていた。『虞美人草』にあつては、作中人物の「歩行方」の「片足が新で片足が旧の様だ」という見立ての内に、「廿世紀」明治日本の歴史的構造の縮図が寓意され、『三四郎』の小川三四郎の歩き方に対する「浪漫的アイロニー」の語による揶揄が、近代日本の知性（外ならぬ大学）の現実遊離性への指弾として機能している。又『行人』の一郎に於いては、いわば歩行不能ともいべきその在り方が問われており、彼は「寐→起→歩→走→……」という無際限の速度の加速を生きざるを得ない様な人物として造型されている。そしてそうした一郎の在り方は、「徒歩→車→馬車→汽車→自動車→航空船→飛行機→……」という、近代科学のテクノロジーの系列の相似形として定位されているのである。近代的な進歩史観の崩壊をそこに見ることは容易いが、その一郎により求め語られる「思ひ掛けない宗教観」は、「絶対即相対」の論理表象によって言われている。大正五年年頭の『點頭録』に於いて漱石は、自己の歩行に即しつつ、「終日行いて未だ曾て行かず」という句を引いている。『碧巖録』の第十六則、そして『禅林句集』も収めるこの句の論理構造は、「動即不動」、つまりは「相対即絶対」ということであり、このことは禅僧香巖への憧憬を告げる『行人』の一郎の「宗教観」の基底が、如何なるものであるのかを告げると共に、『明暗』の中心人物である津田由雄の日々を、「夢中歩行者」として描く漱石の視線が、なにを背景としたものであったのかを明示していると言える。第二章は以上の論述に当てられている。

日本の室町期の臨済僧東陽英朝によって編まれた『禅林句集』の一篇は、今現在に於いても日本の禅林に読み継がれているものである。そしてその書は漱石生涯の座右の書とも言うべきものであり、確証はないが、或いは英国留学に際しても携行されたものであったかもしれない。漱石に最初の精神的な動揺危機の状況が現れるのは、大学卒業前後の頃であるが、そうした自己の状況を告げた明治27年（1894）9月の正岡子規宛の書簡に已に『禅林句集』を出典とする、「不入驚人浪難得称意魚」の句が見出される。又漱石が好んで揮毫した句に、「始随芳草去又遂落花回」があつた。この句の出典は矢張『禅林句集』であり、然もこの句は、漱石の晩年に親交のあつた若い雲水富沢敬道が、漱石の逝去に際して弔電として送った句でもあつた。富沢がその句を見出した文献が外ならぬ『禅林句集』であつたことは自明である。この様に『禅林句集』は漱石の生涯に深くかかわるものであつた。第三章では、そうした『禅林句集』と漱石とのかかわりを、『一夜』『草枕』『三四郎』『門』『行人』等の作品の内に尋ねると共に、『禅林

句集』出の「漾虚碧堂」という漱石の堂号が漱石の内に描いた軌跡等々を、近代の禅者柴山全慶の『訓註 禅林句集』の註等をも参照しつつたどってみた。例えば『草枕』には禅僧大徹の書として、「竹影払階塵不動」の句が記されている。宋代の禅者雲峰祖燈志の上堂語であるこの句の漱石に於ける出所は、『禅林句集』であった筈であり、「動即不動」即ち「相對即絶対」の在り方を指示するこの句は、『草枕』の内に様々な変奏の姿を見せているものである。そして柴山全慶のこの句に対する註のしかたは、「明暗双々無作の妙用を云う。」というものであった。

明治38年（1905）の9月に発表された『一夜』は、漱石が初めて本格的本質的に自己の文学の中で禅を問題にした作品と言える。或いは明治近代日本の中で禅がその宗教性を現実化することが如何にして可能であるのか。そしてそれを文学的に問うことが果たして可能であるのか。そうした文学の方法論として極めて実験的な意図を秘めた作品が『一夜』であり、それ故に難解な相貌を不可避のものとしていたと考えられる。『一夜』は三人の人物によって織り成される一種の思想劇である。一人は髯のある男、一人は涼しき眼の女、もう一人は丸顔の男である。髯の男は「美しくき多くの人の、美しくき多くの夢」を語る、人間の意識－自意識の場を住処とする人間。一方の丸顔の男は、上の髯の男の言葉に対して、「描けども成らず、……夢なれば、描けども、成りがたし」という「禅語」により裁断を下す人物。つまり意識－自意識の場を離れた、或いは超えた「自然」の場を志向する人物という設定のうちにある。『一夜』では、「描けども成らず」とされたその「画」の成、不成が、言わば明治近代日本に於ける禅的自然性、実在性の現成にかかわるものとして問われている。作品の展開は、涼しき眼の女、恋愛の体験から来た「愁」の内に生きる女性、が髯ある男と丸顔の男の間に一時的に画中の女に転成する姿を描くことで終わる。明治の歴史的現実の象徴とも言える女性の画への転成は、漱石の文学的方法的見取り図の成立の示唆でもあったと言えよう。

第五章の論の対象は『草枕』と『こゝろ』であるが、『草枕』は第四章の『一夜』と密接な関連を有する作品である。『草枕』のストーリーの基本が、破婚者那美の画の成立をめぐるものである所にそのことは明示的であり、『一夜』の極度の象徴性を、より現実性の場に解放しながら同一方向の課題を問題とした所に、『草枕』は成立していたというべきである。そしてその為を選択された禅の命題が、公案「婆子焼庵」であった。禅の公案としての「婆子焼庵」自体は、一見禅者の生理にかかわるものの様に見えるが、併しそれは様々な応用可能な論理性を持ったものである。AとBとの二者択一の状況の下で、その何れを選択したとしてもそれも又不可になるということ。それを二律背反つまりアンチノミー、ダブル・バインド、或いは絶対矛盾（的自己同一）等と呼び方は様々としても、そこからの透過が人間の現実の場で如何にして機能し得るのかということが、漱石文学の中核の課題でなければならなかった。『草枕』では「婆子焼庵」の公案は、禅刹観海寺の若僧泰安と那美との挿話として示唆されているが、そのエピソードそのものは必ずしも重要ではなく、むしろ日露戦争前後の近代日本の様々な二律背反的状況、そしてそれを背負わされた女性としての那美の「画」の成就への過程に、「婆子焼庵」の公案への問の実質はあったというべきである。そして漱石が明治の歴史的現実の総体を問う形で、「婆子焼庵」の公案をその中に置いたのは『こゝろ』である。明治の終焉を扱いつつ、二人の人物の自殺を描き切った『こゝろ』には、禅仏教を思わせるものは殆どないかにみえる。併しそこにこそむしろ漱石と禅とのかかわりの本質的なもの、ということ禅仏教そのものの本質的な開示があったと見られるべきである。

第六・七・八の三章は、漱石の遺作となった『明暗』を論の対象としている。その中で第六章は、『明暗』の題名である「明暗」が漱石自らにより「禪語」されていることに端緒を求め、漱石と禪とのかかわりの全体的な見取り図の提示を試みた章である。漱石が明治40年（1907）に読んだ『禪門法語集』への書き込みには、「コレハ論理的ニチカシ、棒喝ノ類ニアラズ」「哲学ト禪ハ此相違ヲ存ス」といったものがあり、同様の漱石の思惟は大正五年の漢詩では、「漫行棒喝喜縦横 胡乱衲僧不值生」とした形となっていたと考えられる。ここにあるのは禪の内に論理性を要求する漱石、或いは禪の没論理性への批判者としての漱石ということである。それではそういう批判者としての漱石の立脚点であった言わば近代の科学的知性は、真に漱石の基盤たり得ていたのか。又禪とはそもそも単なる没論理、無論理の立場にとどまるものなのか。そうした禪と論理、近代的知性と禪つまりは宗教とのかかわり、という問題が漱石と禪との基底に横たわっていた一つの大きな事柄であったという視点から、「明暗」「明暗雙雙」の禪語、即ち理事無礙の世界を意味するその語を、遺作の題名とするまでの漱石の歩みをたどってみた。そしてそうした漱石の歩みが、近・現代の禪宗の論理性の欠落と又それ故の社会性（仏教に所謂大悲）の欠如を嘆く、鈴木大拙晩年期の言に沿い得るものでもあったことを述べた。

『明暗』の題名「明暗」に関して漱石は、漢詩中の句として「明暗雙雙三万字」の措辞を見せ、「明暗雙雙」を「禪家の熟字」としている。即ち「明暗（雙雙）」の語については、漱石自らに明瞭な禪語としての意識があったということである。それではその「明暗」「明暗雙雙」とは如何なる意味、宗教的意義を内包とした言葉なのか。漱石はその語を如何なる文献の内に見出し、自己の語彙、遺作の題とするに至ったのか等々、「明暗」の語と漱石とにかかわる様々な側面に考察を加えたのが第七章である。従来漱石研究にあっては、「明暗」の語の禪仏教に於ける基本的な意味についてすら、明確な理解は得られていなかった。漱石が「明暗（雙雙）」の語を見出した禅籍としては、『碧巖録』第五十一則が確実なもの第一であったと言える。それではそこでの「明暗雙雙底の時節」の語は、如何なる意味を帯びて使われているのか。更に漱石文庫中に、数種の『碧巖録』の版本等と共に蔵されている『槐安国語』、つまり大徳寺の開山大燈国師の『大燈国師語録』に対する白隠の評唱であるその文献中に見出される「明暗」「明暗雙雙」の語は、禪家の如何なる思惟を告げているのか等をも探索してみた。しかもそれではそうした禪語としての「明暗」を一方にしながら、漱石自身のその「明暗」への理解と解釈はどの様なものであったと考えられるのか。そのことを明らかにすることは果たして可能なかどうか。そうした観点の下に、大正5年10月12日作の漱石の七言律詩を考察の対象としている。

第六・七の二章が作品『明暗』の題名である禪語「明暗」に対する考察であったのを受けて、第八章は『明暗』論の一章に当ててある。但し、「明暗」は「禪家の熟字」という漱石自らの言葉はあるにしても、そのことは単純に作品『明暗』が禪の立場を起点として構想と執筆とがなされた作品ということにはならないし、又『明暗』は禪の視点から読まれ、論じられるべき作品であるということにもならない。漱石と禪とのかかわり、従って漱石文学と禪との問題は、決してその様に直線的直截的な断面を覗かせる様なものではなかった。『明暗』は第一次世界大戦下の時代を背景とした、漱石作品の中でも最も長編のしかも未完のままに遺されることとなった作品である。『明暗』に関する研究、評論の数はもとより歴大である。本章に於いては『明暗』の世界を根底的に動かしているものとして、津田由雄の曾ての失われた恋人清子への思念ということに焦点を合わせて、津田と清子とのかかわり、その二人の再会の内に『明暗』

が語ろうとしているものは果して何であるのかを詳論してみた。清子を前にした津田の二極化的な自己分裂、そしてその一方の極に即した彼の清子への問いが、彼女による津田への批判と否定という結果を現前させてしまうものであること。そこに漱石晩年の講演「素人と黒人」、或いは所謂則天去私はどの様にかかわるものなのか、それらのことを論じてみた。

漱石と禅とのかかわりの中核には、「生死の超越」という命題があった。「生死の超越」とは禅語でそのことを一言で言えば、「大死」という言葉で言われているものである。明治三八年頃の執筆と考えられる、一般には「文学論ノート」として呼ばれている漱石の文章中には、「超脱生死」と題された一文があり、そこで漱石は相対と絶対との相関という形で「超脱生死」、つまり「生死の超越」の命題を思惟の対象として記している。そしてその命題の漱石内での生起の時期を、鎌倉円覚寺での参禅の時と明記している。「超脱生死」の文章中の漱石は、「生死の超越」を不可とする立場、その意味ではむしろ禅批判的な立場である。併しやがて漱石文学の展開は、『行人』の一郎に「絶対即相対」という論理表象での「生死の超越」を希求させざるを得なくなり、次の『こゝろ』では、二人の人物を死に至らしめている。『こゝろ』擱筆後の漱石には、晩年期の漱石の死生観の表明としてしばしば引用される、弟子宛の著名な書簡がある。又『こゝろ』『道草』『明暗』という作品の流れの中で、『道草』起筆直前の漱石の断片として、「相対即絶対」「現象即実在」という論理を背景とした、矢張「生死の超越」への志向を内容としたものがある。それらノート、作品、書簡、断片等は相互にどの様にかかわり、明治二十八年頃を起点としていた筈の「生死の超越」の命題は、漱石の人及び文学の歩みの中で、如何にして禅仏教本来の収束の方向を見せて行っていたのか。第九章はそれらの論究に当てられている。

『草枕』の女性那美のモデルは、漱石が熊本の五高在任中に幾度か訪れている小天温泉の、前田案山子の娘卓子であるとされている。卓子の妹槌子は、中国民国革命の志士宮崎滔天の妻であり、明治三八年の上京後は卓子も槌子と共に、孫文黄興等の人々の世話に当たっていた。卓子には異母弟利鎌がおり、利鎌を伴って漱石の許を訪ねたりしているが、利鎌が自ら漱石山房を訪う様になったのは一高在学中の大正五年即ち漱石逝去の年であり、言わば最末席の弟子であった。前田利鎌は一高から東大文学部の哲学科へ、東大卒業の後は東京高等工業、つまり現在の東京工大の教壇に立っていた。併し昭和6年(1931)33歳の若さでチフスにより急逝した。漱石と前田利鎌とは現実的な交渉の期間も短く、一方は文学者作家、一方は哲学者という、それぞれの分野の相違ということからしても、むしろ接点は無に近い様にも見える。併し二人の意想外の近似性を思わせるもの、従って前田利鎌が漱石の水脈の涌出点とも考えられるのは、両者が共に所謂漱石山脈の人々の内にあることは、言わば例外的に禅に赴いていたということである。前田利鎌には生前自らの編集による『臨済・荘子』の著書があり、没後に、それにゲーテの『ファウスト』論及び禅関係の文章幾篇かを合わせる形で、『宗教的人間』の一冊が刊行されている。そこに見られる前田の思惟を漱石のそれと対照させる中から、禅を背景としたそれぞれの航跡を論じたのが、第一部の終章である。

第二部に移りたい。漱石は生涯に二百十首弱の漢詩を遺している。その内大正5年、即ち『明暗』執筆年の8月半ばから11月下旬にかけて、『明暗』の執筆と平行しながら、全体の約三分の一に当たる75首の漢詩が連作の形で制作され、七言律詩を主としたその漢詩群が、禅僧の偈頌に類した性格のものであったことは周知である。『明暗』期に限らず漱石の漢詩はどの様に扱われ論じられるべきであろうか。漢詩と言えば伝統的には、訓詁註釈による扱い方が第

一の基本であり、漱石詩に関してもそうした形による註釈書が、已に十冊近くに達している。漱石漢詩の註釈書に特徴的なことは、一方に中国文学者によるものがあり、その一方に禅学者禅門の人によるものがあり、その両者が截然として来ているということである。最新の岩波書店の『漱石全集』第一八巻漢詩文の巻は、中国文学者一海知義氏によるものであるが、その特に『明暗』期の部分は、禅学者入矢義高氏の力が大きかった（一海氏の言）。漱石詩註釈書の二分化という基本は動いていないのである。『明暗』期の漱石の中で、『明暗』の執筆と漢詩制作とは、どの様な相関性の内にあったのかは、留意されるべき事柄であるが、漢詩人としての漱石は、同時に近代の散文作家としての漱石でもあったのであり、小説の作者としての漱石は、『木屑録』以来の漢詩文の制作者としてのそれでもあった。本論文の第二部はそうした観点に立ち、漱石の、例えば『明暗』期の漢詩を、単に訓詁註釈的な解析の対象とするのみにはとどめずに、一定の論の流れの中に投入しつつ、その漢詩の内的意味を、漱石文学総体の中に措定することを試みている。

「青春二三月 愁随芳草長」「眼識東西字 心抱古今憂」。「病骨稜如劍 一燈青欲愁」「孤愁空遶夢 宛動蕭瑟悲」。「苦吟又見二毛斑 愁殺愁人始破顏」「百年功過有吾知 百殺百愁亡了期」。句点毎にそれぞれ、熊本時代、修善寺の大患期、『明暗』期、の漢詩に見られる「愁（憂）」の文字である。漱石詩の全体でその文字は四十二の使用例があり、従って約五首に一例は見出されることになり、漱石漢詩の基本的情調と呼ぶべきものであった。漢詩には無論『詩経』『楚辞』以来の言わば憂愁の系譜があり、阮籍は「詠懷詩」に「憂思独傷心」と言い、陶淵明は「飲酒詩」に「忘憂物」を詠い、杜甫は「一生を愁う」とされた。第二部第一章では、漱石漢詩中の「愁（憂）」について、それと「白雲」そして「雲」とのかかわり、「暗愁」と「閑愁」との相関、「愁殺愁人」といった禅語の現れる『明暗』期の漢詩の内等に、消失されるべきものとしての「近代」の憂愁から、そうした時代性からの脱化に於て現成する、言わば実在としての「愁（憂）」への展開といった事柄をたどった。

『明暗』期大正5年9月5日作の七言律詩に、「勿令碧眼知消息」の句が現れる。「碧眼をして消息を知ら令むる勿れ」と訓読されるこの句の「碧眼」の語について、在来（当該論文の執筆発表時）の諸註釈書の註は、一書を除けば、凡て「西洋人、毛唐」とするものであった。近代の日本語中のその語が欧米人の意味であることは言わずもがなであるが、例えば禅文献の中での「碧眼」が達磨を指したものであることも自明のことである。漱石に於ける『明暗』の「明暗」「明暗雙雙」の出所と見得る、『碧巖録』第五十一則の頌には、「黄頭碧眼須甄別」の句があり、ここの「黄頭」は釈迦、そして「碧眼」はほかならぬ達磨の謂である。先の句中の「碧眼」を禅家本来の達磨の意とした場合、それを受けた結句の「欲弄言辞堕俗機」の措辞、そしてこの詩の首聯の「絶好文章天地大 四時寒暑不曾違」という言い方とも合わせて、その詩的内容が漱石の言語観、言語論の表明であったことが知られる。しかもこの漢詩は単独にあったのではなく、大正5年の9月1日、2日、10日、18日、19日と展開される、漢詩に於ける漱石の、ある持続的な同一の思惟への反復的な投企の試みの中の一詩であったことが明らかになるのである。それらは不立文字を言う禅、道得、不道得を語る道元の言語論とも重なる、『明暗』の作者としての漱石に於ける言語への思惟の場であった。以上第二章である。

大正5年の12月9日、それが漱石逝去の日であるが、漱石は11月の21日に未完の遺作となった『明暗』の最終第188章を書き、夕刻からは知人の結婚式に出席、翌22日には執筆不能の状態となった。漱石の漢詩制作は11月20日の夜が最終であり、「真蹤寂寞杳難尋 欲抱虚懷步古今」

と始まるその七言律詩は、漱石漢詩の最後に位置するものとして、漱石評伝の筆者に限らず、この詩を引用し論ぜざれば漱石論としての画龍に点睛を欠くといった風情で、常に論の対象とされて来たものである。併し論者の様々な思念や想念の投影体とされて来た割には、その七言律がそれ自体として、如何なる詩的な内容内実を備えたものなのかが、厳密な訓詁と註釈の対象とされることはむしろ稀であったと言える。この三章では先ず始めに、『明暗』期の漢詩群をどの様に考えるべきなのかについて論及した。『道草』『明暗』期の漱石には、「自然の論理」という言葉に集約された、ある論理性の自覚があった。『明暗』期の漢詩群とは、そうした論理性の覚証の場であった筈であり、水村美苗氏による『続明暗』（筑摩書房）の試みの『明暗』との決定的な落差も、その起因は、『明暗』期漢詩群が支えた筈の『明暗』に根底的な論理、論理性の欠如にあったと見得る。本章ではそれらを踏まえつつ、漱石詩の最後の七言律を取り上げ、例えば第七句の「眼耳雙忘……」の初案が、「視聽雙忘……」であったこと、つまりその推敲の跡が語るであろう漱石の詩的思惟の内景等々についてたどった。

「勿言不会禅 元是山林客」。大正5年の10月下旬、東京早稲田南町の漱石宅に止宿した、若い二人の雲水が帰るに際して贈られた、漱石の自画賛の五絶の転結句である。ここに象嵌された「元是」の語は漱石の嗜好に合ったらしく、漱石は上の漢詩よりも早く、10月21、22日の両日の連作の形で「元是……」で始まる句を起句とする6首の五絶を試みている。それでは一般的な詩語とは言い難い「元是」の語は、何故に漱石の関心をひき、若い禅の雲水宛の自画賛中にも点綴されたのであろうか。つまりその語の出所はどこにあったのであろうか。この事柄に関しての一義的な限定は必ずしも容易ではないが、第一部でも扱った『禅林句集』には九句程の用例が収められている。そしてその中にも見出されるものであり、禅宗史では著名な、禅の所謂五家の一つ法眼宗の始祖法眼文益の偈頌として「円成実性頌」があり、それは「理極忘情謂 如何有喻齊」と書き出され、「拳頭残照在 元是住居西」と結ばれるものである。漱石にこの偈頌への確実な視線があったか否かは明示はし得ない。併しこの第一、二句の示唆する、「理」の極限に於ける「情謂」の忘・没却、そしてそこが「喻齊」の究破に於いて現成する実在としての世界であるとする法眼の立場は、「現象即実在」「相對即絶対」に於ける「生死の超越」、その「自然の論理」を言う漱石のそれに通底したものである。然もその「喻齊」即ち「比喩」の透過を告げた法眼の立場は小宮豊隆が漱石の「則天去私」解釈に際して援用した、ゲーテ『ファウスト』第二部末段の「das Gleichnis」の立場の突破を語ったものとして、漱石の思想的境位の、近世以来の西欧精神史の流れの中での位置と意味とを知らしめるものと言えるものである。第四章の後半は、これらゲーテ『ファウスト』を起点とした、ニーチエ、ドストエフスキー、カール・バルト等への流れの中での、漱石の比較思想論的な問題を扱っている。

最後に第二部の付章について触れておきたい。『明暗』期漱石漢詩の推敲過程は、論文題名が示唆する如く、東北大学付属図書館の「漱石文庫」の歳になる、漱石の『明暗』期の「漢詩ノート」の語る、漢詩の推敲過程を解析解説したものである。「漢詩ノート」のコピーは禁止されていたので、写真に収めそれを対象とした。従来『明暗』期の漱石詩論で、この「漢詩ノート」の推敲過程をも視野に入れた形での論は皆無であった。岩波書店の最新版の『漱石全集』の刊行に際して、岩波書店の需めに応じて本論文は、註釈を担当された一海知義氏に送られている。同全集第十八巻漢詩文の『明暗』期の漢詩の註釈の部分には、漱石の推敲過程の註記が、一海氏の取捨に応じて為されている。尚この間の消息については、岩波書店の『図書』1993年10月号、「漱石特集号」所収の一海氏の文章「漱石漢詩札記」参照。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、夏目漱石の人及び文学と禅との関わりについて考究したものである。漱石と禅との関わりについての従来の研究は、小説では禅との関わりが直接的に描かれている『門』にその多くが集中し、他の作品についてはあまり検討がなされず、また漱石の漢詩についても禅との関わりとその意味が十分に解明されているとは言いがたい状況にあった。論者は、その欠を補い、誤りを訂し、漱石の作品等諸資料から禅語等の禅に関わる表現あるいは発想・思想をあらたに見出して分析・考察を加え、漱石における禅の位置と意味を明らかにしている。

論文の全体は、二部から成り、「第一部 漱石と禅」は、第一章「達磨」、第二章「歩行」、第三章「『禅林句集』」、第四章「『一夜』」、第五章「婆子焼庵」、第六章「漱石と禅——「明暗」の語に即して——」、第七章「「明暗」考」、第八章「『明暗』論——津田と清子——」、第九章「生死の超越——漱石の「父母未生以前」——」、第十章「漱石の水脈——前田利鎌論——」の十章、「第二部 漱石漢詩と禅」は、第一章「漱石の漢詩に於ける「愁（憂）」について」、第二章「漱石の言語観——『明暗』期の漢詩から——」、第三章「漱石詩の最後——「眞蹤は寂漠として……」——」、第四章「漱石漢詩の「元是」——西欧への窓——」、付章「『明暗』期漱石漢詩の推敲過程」の十章から成る。

「第一部 漱石と禅」では、まず第一章「達磨」で、漱石の絵画や俳句等をも視野に収めながら、達磨への漱石の関心と関わりを辿り、「心不可得」の語に象徴される禅の問題、宗教的レベルでの人間の「安心」「不安」の問題が、初期の作品『草枕』から『行人』さらには遺作『明暗』にまで貫流するものであることを明らかにする。漱石における禅の位置と意味を究明し、禅を指標として漱石の作品群の内的なつながりを解明した本章は、漱石の人と文学における根本問題の一つを明らかにした成果として、高く評価されるべきものであろう。

第二章「歩行」は、『三四郎』『行人』『明暗』等の漱石文学における「歩行」というものへの持続的な関心に着目し、「歩行」という行為の意味、その宗教性、禅との関わりについて考察する。第三章「『禅林句集』」は、禅林で読み継がれた『禅林句集』（『禅林集句』）が、漱石の生涯の座右の書であったことを指摘し、『一夜』『草枕』『三四郎』『門』『行人』等の作品との関わり等について考察する。作品名としての「行人」の語についてそれを漢籍由来のものとして単なる「旅人、道行く人」の意味でのみ理解するのではなく、『禅林句集』の句が示唆する「終りなき行人」として規定することによって他の作品との思惟の連関の中において理解しようとする論者の主張は、傾聴に値するものである。

第四章「『一夜』」では、それが漱石が初めて本格的・本質的に禅を問題にした作品であり、近代日本の中で禅がその宗教性を現実化することが如何にして可能か、それを文学的に問うことが可能かという、文学的方法論として実験的な意図を秘めたものだったことを明らかにする。また第五章「婆子焼庵」では、『草枕』と『こゝろ』について考察し、『一夜』における課題を、より現実的に、禅の公案「婆子焼庵」を選択して追求したものが『草枕』であり、その公案をよりどころにして明治の歴史的現実の総体を問うたのが『こゝろ』であるとする。禅を思わせるところが無いかに見える『こゝろ』に漱石と禅との関わりの本質的なものがあったことを説く論者の主張は、新しい見解を示したものとして注目されるべきものであろう。

第六章「漱石と禅——「明暗」の語に即して——」、第七章「「明暗」考」、第八章「『明暗』論——津田と清子——」は、遺作『明暗』を対象としている。論者は、従来の研究では明確な



理解が示されていなかった、『明暗』の題名について、『碧巖録』に見出されるその語が、禅語としてどのような思惟を告げるものであるか、漱石自身の理解はどのようなものであるのかを明らかにし、さらに、それを題とする『明暗』が語ろうとするものを、津田・清子との関わりから考察している。未完となったため全体を見通すことが困難な『明暗』について考える上で参考となる貴重な研究であることは、疑いを容れない。

第九章「生死の超越——漱石の「父母未生以前」——」は、漱石と禅との関わりの中核にあった「生死の超越」という命題について、「文学論ノート」、『行人』『こゝろ』『明暗』等の作品、書簡、断片等多くの資料を検討し、その命題が漱石の人及び文学の歩みの中でどのようにして禅本来の収束の方向を見せて行ったかということについて論究する。第十章「漱石の水脈——前田利鎌論——」は、弟子前田利鎌と漱石の思惟を対照させることによって、禅を背景とするその思惟の航跡を解析する。

「第二部 漱石漢詩と禅」では、まず第一章「漱石の漢詩に於ける「愁（憂）」について」で、漱石漢詩に四十二の使用例が見られる「愁（憂）」について考察し、漱石漢詩の基本的情調を明らかにする。第二章「漱石の言語観——『明暗』期の漢詩から——」では、『明暗』期の七言律詩の句「勿令碧眼知消息」中の「碧眼」について、それが達磨を指すものであるとして、そこに漱石の言語観、言語論の表明を見、さらに第三章「漱石詩の最後——「眞蹤は寂漠として……」——」で、最後のものとなった漱石の漢詩の詩的な内実がどのようなものであったかを明らかにする。これら三章の考察を通じて、『明暗』期の漢詩群が「自然の論理」という言葉に要約された、ある論理性の自覚の覚性の場であったことが解明される。第四章「漱石漢詩の「元是」——西欧への窓——」では、漱石漢詩に目立つ「元是」の語と禅との関わり、漱石の比較思想的な問題について考察する。以上、いずれも漱石漢詩の語の検討を通して、その思想的意味、禅との関わりを明らかにしたものとして意義のある研究である。

また付章「『明暗』期漱石漢詩の推敲過程」は、従来、誤った形で部分的に引用されていた、東北大学附属図書館蔵「漱石文庫」中の『明暗』期の漱石「漢詩ノート」を精密に検討し、その推敲過程を明らかにした労作であり、今後ながく漱石研究に資するものである。

以上、二部十五章から成る本論文は、漱石の作品等諸資料から禅語等の禅に関わる表現あるいは発想・思想を見出し、その精緻な分析を通して独自の理解と多くの新知見を提示している。その成果は、漱石研究に新しい展望をひらいたものとして高く評価されるべきものであり、斯学の発展に寄与するところ極めて大である。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。